

16.各領域の活動

<がん看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会

看護相談事業の一環として、地域の看護師とがん看護学領域の学生とともに、がん患者と家族へのケアの質向上を目指して、継続的に「質の高いがん看護実践を検討する会」としてケア検討会を開催している。令和4年度は、『再発・進行がん患者への補完代替療法～有用な看護介入～』をテーマに開催した。今年度もCOVID-19への感染対策として、Web会議システムを用いた開催方法をとることで地域の看護職者が安心して参加できるように努めた。

【第1回】

テーマ：精神症状のある再発・進行がん患者へのリラクゼーション法

日時：令和4年8月27日(土)13:00～15:00

場所：オンライン

参加者：7名(看護職者5名、教員2名)

【第2回】

テーマ：リンパ浮腫のある再発・進行がん患者への緩和ケア

日時：令和5年2月4日(土)13:00～15:00

場所：オンライン

参加者：11名(看護職者9名、教員2名)

2) リカレント教育

がん看護学領域では、①がん看護の質向上のための自己研鑽・情報交換、②修了生のネットワークづくりの充実を図ることを目的として、がん看護学領域修了生の会『アストラルの会』を発足し、活動している。COVID-19への感染対策や遠方の修了生が参加しやすいよう、Web会議システムを用いて開催し、修了生の自己研鑽の場になるように取り組んだ。事例を通してがん看護専門看護師としての支援や組織のニーズに応じた活動の在り方を検討した。

【第1回】

テーマ：易怒性、認知機能の低下により治療の継続が困難な患者へのかかわり

事例提供者：がん看護専門看護師 島田 美華 氏

日時：令和4年10月1日(土)10:00～12:00

開催方法：オンライン

参加者：15名(修了生13名、教員2名)

【第2回】

テーマ：高齢肺がん患者の在宅療養を支えるがん治療病院と地域の病院・支援者との連携

事例提供者：がん看護専門看護師 竹内 奈々恵 氏

日時：令和5年2月18日(土)10:00～12:00

開催方法：オンライン

参加者：15名(修了生13名、教員2名)

3) がん看護学領域特別講義

がん看護学領域特別講義では、がん看護学領域の修了生が後輩である大学院生や修了生を対象に、修了後のがん看護専門看護師としての役割開発のプロセスや日頃の実践活動について語る機会を提供してい

る。

テーマ：がん看護専門看護師の実践と役割開発

講師：鹿児島医療センター がん看護専門看護師 野口 久美子 氏

日時：令和4年9月30日(金)10:00～12:00

開催方法：オンライン

参加者：12名(本学大学院生5名、他学大学院生4名、修了生3名)

内容：がん看護専門看護師認定後から現在に至るまでの活動として、役割獲得に向けた戦略や実践、院内のがん看護の質向上に向けた取り組み、また、コロナ禍におけるがん看護の取り組みについて講義をいただいた。本学の大学院生は、活躍している先輩の講義を受けて、役割開発のプロセスを学ぶことで、組織分析を生かした仕組みづくりやがんの質向上に向けた仲間づくりの大切さを再認識し、修了後の自身の役割について具体的に考え、自身の課題にも向き合う機会になっていた。

4) がん教育外部講師派遣事業

がん対策推進基本計画に、がん教育・がんに関する知識の普及啓発が課題にあげられており、各都道府県でがん教育への取り組みが行われている。高知県では、がん教育の内容を充実させ、がんに関する正しい知識を理解し、がんを学ぶことを通して健康といのちの大切さに気づくことを目指し、外部講師派遣事業が行われている。今年度は、県内の高校から派遣依頼を受けて3名の教員が高校生および職員を対象にがん教育を実施した。

(1) 土佐市新居小学校

日時：令和4年7月12日(火)

対象：5・6年生

講師：高知県立大学看護学部 三浦 由紀子

内容：がんの基礎知識、がん検診の大切さに関する授業

(2) 高知県立山田特別支援学校高等部

日時：令和4年9月14日(水)

講師：高知県立大学看護学部 有田 直子

内容：がんの基礎知識、がん検診の大切さ、たばこがんに関する授業

(3) 土佐市戸波中学校

日時：令和4年12月16日(金)

対象：2年生

講師：高知県立大学看護学部 廣瀬 未央

内容：がんの基礎知識、がん検診の大切さ、たばこがんに、がん治療に関する授業

(4) 高知市布師田小学校

日時：令和5年2月9日(木)

対象：高知県立大学看護学部 田之頭 恵里

内容：がんについての基礎知識、がん検診の大切さ、たばこがんに関する授業

2. 研究活動

がん看護学領域では、それぞれの教員が研究代表者(基盤研究B)として、また共同研究者として(基盤研究C:4件、B:1件)科学研究費助成金を受けて研究活動に取り組んでいる。(各教員の取り組みについては、教員の活動、研究に関する報告を参照)

修士論文・博士論文の令和4年度の公表状況は、下記の通りである。

【修士論文】

- 1) 冨田智美, 藤田佐和, 森本悦子: 女性生殖器がん患者の外来術後補助化学療法中に体験したことに対する対処, 高知女子大学看護学会誌, 48(1), p85-92, 2022. 12
- 2) 上田美智代, 藤田佐和, 森本悦子: 一般病棟看護師による終末期がん患者へのアドバンスケアプランニ

ングの看護実践, 高知女子大学看護学会誌, 47(2), p 31-40, 2022. 6

- 3) 今井ユミ, 藤田佐和, 森本悦子: 急性期病棟の看護師が行う終末期がん患者の意向確認, 第 37 回日本がん看護学会学術集会, 横浜, 令和 5 年 3 月.
- 4) 隅華奈, 森本悦子, 藤田佐和: 術後の壮年期がん患者に対してがん相談支援センターの看護師が行う就労支援, 第 37 回日本がん看護学会学術集会, 横浜, 令和 5 年 3 月.

【博士論文】

- 1) 宮宇地秀代, 藤田佐和: 看護師と患者の協働の概念分析-血液透析患者の看護支援における概念活用の有用性, 高知女子大学看護学会誌, 47(2), 1-10, 2022. 6

3. 活動の評価

今年度も COVID-19 の影響により、集合研修を開催することはできなかったが、オンラインを活用し、継続した活動が行えるよう取り組んだ。

社会貢献活動におけるケア検討会では、前年度のケア検討会参加者に実施したアンケートに基づき、学習テーマを取り上げることで、ニーズに合わせた学習に取り組めたのではないかと考える。

リカレント教育では、オンライン開催を継続したことで、県内外の修了生が参加することができ、先輩 CNS との活発な意見交換が行われて、研鑽の場になった。

4. 次年度の課題

社会貢献活動については、COVID-19 の感染状況に応じた開催方法を検討していく。ケア検討会では、次年度に向けたアンケート調査を実施し、地域の看護職者のニーズに合わせた内容を検討し、多くの方々に参加いただけるよう企画していく。リカレント教育については、次年度もオンラインを活用し、修了生同士のネットワークづくりを強化していく。

研究活動については、修了生の論文投稿の支援および教員が取り組んでいる研究を進め、結果を公表できるように取り組む。

<慢性期看護学領域>

1. 社会貢献活動について

- ・高知県糖尿病保健指導連携体制構築事業の実施

高知県は、全国に比べて男性の壮年期死亡率が高く、糖尿病をはじめとする血管病対策が喫緊の課題となっている。このため、糖尿病に焦点をあて、糖尿病が重症化しやすいハイリスク者の減少及び、治療中断者の減少を目的に令和元年度より高知県より委託を受け、糖尿病保健指導連携体制構築事業を実施した。詳細の事業報告は、「健康長寿センターにおける活動」にて報告している。

1) モデル基幹病院の糖尿病療養支援体制の強化(13 施設)

モデル基幹病院の糖尿病療養支援体制の強化として、血管病調整看護師及び候補者を対象に、web 会議システムにより、1 年間の研修計画と活動の協働目標、及びケア調整活動のツールを検討・共有する研修説明会を 1 回、スキルアップ研修会を 3 回、合同事例検討会を 1 回、計 5 回の合同研修会を開催した。スキルアップ研修会は、各施設の血管病調整看護師の院内連携と地域連携の仕組みづくりに関する現状と課題の共有、ならびに階層的なケア調整プログラム(レベルⅠ～Ⅲ)へハイリスク者を迅速にトリアージできるよう、各レベル対象者の特徴理解と各レベルのケア調整フローとハイリスクケアメニューの作成を支援した。合同事例検討会では、1 年間の活動の振り返りと課題の明確化を行った。13 施設合同の研修会は、計 5 回開催し、参加者は延べ 84 人であった。

2) 公開講座の開催

本事業及び高知県の糖尿病重症化予防の取り組みを県内多職種や市民に周知する目的で、公開講座を web 会議システムにより 2 回開催した。第 1 回公開講座は医療者を対象とし、テーマ「先進事例に学ぶ 糖尿病重症化予防の循環型地域医療連携の拓き方」のもと、県外で地域連携と糖尿病コーディネートケアの先進事例をそれぞれ推進する講師を招聘し、講演会を開催した。第 2 回公開講座は医療者と市民を対象とし、テーマ「生活習慣病を悪化させないために！」のもと、県内の血管病重症化予防の施策を推進する行政担当者と本事業責任者、ならびに糖尿病の悪化予防を推進する糖尿病専門医を講師として招聘し、講演会を開催した。参加者は延べ 101 人であった。

3) 院内事例検討会・コンサルテーション

モデル基幹病院 13 施設に対し、コロナ感染状況に応じて対面もしくは web 会議システムにより、院内事例検討会・コンサルテーションを実施した。13 施設のうち実施施設は 11 施設、参加者は延べ 55 人であった。

4) 事業報告会の開催

事業報告会は、新型コロナウイルスの感染リスク拡大の可能性を回避するため、オンデマンド開催とした。事前に視聴希望者へ URL を通知し、3 月 24 日より 1 ヶ月間の視聴期間を設けた。

2. ケア検討会およびリカレント教育の開催

高知県内の看護職とともに慢性疾患をもつ人の体験や背景を理解し、看護について検討することを目的に 7 月にケア検討会・リカレント教育の同日開催および 3 月にケア検討会を開催した。

1) 第 1 回ケア検討会・リカレント教育

日 時：令和 4 年 7 月 30 日(土)13:30~15:30

方 法：高知県立大学池キャンパスをホストに Zoom を用いた開催

参加者：事例検討会 17 名 大学院生 1 名 教員 4 名 計 22 名

リカレント教育 16 名 大学院生 1 名 教員 4 名 計 21 名

内 容：

【ケア検討会(13:30~14:30)】

①事例提供者：高知県立大学大学院看護学研究科博士前期課程 竹崎陽子

「糖尿病足病変が重症化した壮年期男性～社会環境と家族員としての病体験の影響～」

②ディスカッション

糖尿病足病変が重症化した事例に対して、その人の病体験の理解のプロセスについて報告していただいた。事提供者および参加者から、様々な経験や背景をもつ人の病体験を理解するために他者とのディスカッションなどによる多様な視点での振り返りの重要性について意見がだされた。

【リカレント教育(14 : 30～15 : 30)】

①話題提供者：高知県立大学大学院看護学研究科博士前期課程 竹崎陽子

「糖尿病足病変に対する看護実践報告の現状と課題 ～CNS 実践事例から得られた介入のヒント～」

②ディスカッション

自覚症状に気づきにくい糖尿病足病変をもつ人への看護実践の現状と課題について文献検討から明らかになったことを報告していただいた。ディスカッションでは、参加者それぞれに体験している事例を共有しながら、患者自身に興味をもってもらうための支援について意見がだされた。

2)第2回ケア検討会

日 時：令和5年3月10日(金)18:00～19:20

方 法：高知県立大学池キャンパスをホストに Zoom を用いた開催

参加者：6名、教員4名 計10名

内 容：①事例提供者：高知県立大学看護学部 助教・慢性疾患看護専門看護師 益宏美
「看護師を攻撃する患者の背景の理解とケア」

②ディスカッション

声を荒げるといった言動で看護師が攻撃されていると感じる事例について、その人の言動の表層だけでなく深層部につながる背景から理解を深めていった。ディスカッションでは、参加者それぞれの経験の共有とともに看護師のラベリングの功罪や病院という特殊な環境におかれた患者の背景を理解することの重要性について意見がだされた。

3.慢性期看護学領域修了生との交流会開催

慢性期看護学領域での修了生と顔の見える関係づくりを目的に交流会を開催した。

日 時：令和4年7月30日(土)11 : 30～12 : 30

参加者：博士後期課程修了1名、博士前期課程修了3名、博士前期課程1名、博士後期課程1名、教員1名 計7名

方 法：高知県立大学池キャンパスをホストに Zoom を用いた開催

内 容：自己紹介を行い、近況報告や修了生同士での質問、今後の活動予定について報告し、交流を深めた。

4.次年度の課題

新型コロナウイルス感染症の感染状況を確認しながら、可能な限り対面での訪問を実施し血管病調整看護師の活動継続を支援する。

モデル基幹病院における、血管病調整看護師の後進育成について検討する。

本事業の活動内容を広く周知するために、リカレントやケア検討会の活用を検討する。

<急性期看護学領域>

1. 社会貢献活動について

1) ケア検討会(看護相談室)

急性期看護学領域では、臨床現場で実践している看護師とともに、重症患者や家族へのケアの質を高めることを目的として、「クリティカルケア看護学ケア検討会」と称して事例検討会を開催している。第1回は、令和4年6月4日にオンラインで開催し、HOT導入を検討中の患者が感染を契機に救急搬送された事例について検討し、6名の参加があった。第2回は、令和4年10月8日にオンラインで開催、8名が参加し、人工血管の感染を契機として全身状態が悪化するなかで前向きに治療に取り組む患者へのケアを振り返った。

2) リカレント教育

(1) クリティカルケア看護学領域リカレント教育

リカレント教育では、在学生や修了生を対象に、現在活躍している専門看護師を迎え、学習の機会を提供している。今年度は令和4年9月27日に、倉敷中央病院 急性・重症患者看護専門看護師の北別府孝輔先生を講師に迎え、「集中治療後症候群(PICS)予防における専門看護師の専門的実践」をテーマに特別講義を開催した。オンラインでの開催とし、7名の参加があった。基本的なPICSの概念や対応方法などの知識に関する講義と、実際に講師が展開してこられたPICS予防の関わりや、集中治療の場から一般病棟へのシームレスな看護を展開するための方略についてご紹介いただいた。在 student と修了生が、ディスカッションや意見交換を行い、修了後の継続学習の場となっている。

(2) CCNS 申請への支援および修了後の継続学習

今年度はオンラインにて事例検討会を5回、学習会を1回開催し、のべ34名の参加者があった。開催内容は以下の通りである。

- 第1回：令和4年5月28日「実践」
- 第2回：令和4年6月25日「倫理調整」
- 第3回：令和4年7月23日「コンサルテーション」
- 第4回：令和4年8月27日「コーディネーション」
- 第5回：令和4年9月24日「実践」
- 第6回：令和5年3月17日「集中治療後症候群(PICS)学習会」

2. 研究活動について

急性期看護学領域では、それぞれの教員が科学研究費等の助成を受け研究活動に取り組んでいる。

2021年度から「クリティカルケア看護師の緩和ケアコンピテンシー育成プログラムの開発」(研究代表者：大川宣容)、2020年度から「ICUにおける人工呼吸器装着患者の集中治療後症候群予防のケアガイドライン開発」(研究代表者：神家ひとみ)、2018年度から「消化器がん患者の周術期ヘルスリテラシー支援プログラムの開発」(研究代表者：森本紗磨美)、2017年度から「トランジションを基盤としたICU新人看護師の看護実践能力向上支援プログラムの開発」(研究代表者：田中雅美)の研究に取り組んでいる。

さらに、他機関の共同研究として、「救護所における円滑な活動を支援する状況対応アルゴリズムの作成」(研究代表者：森本紗磨美)、「術前の心理的準備性向上による術後認知機能障害を防ぐケアモデルの開発」(研究分担者：森本紗磨美、田中雅美)、「e-ラーニングによる介護者のためのエンハンスメント・プログラム活用の在宅療養支援」(研究分担者：大川宣容)に取り組んでいる。

また、修了生の研究活動支援により、2名が第18回日本クリティカルケア看護学会にて発表した。修士論文として「日常ケア場面におけるICU看護師の葛藤」のテーマで研究に取り組んだ。

3. 大学院関連

クリティカルケア看護学領域 CNS コース1名の大学院修了生を輩出し、新たに2名の急性・重症患者

看護専門看護師が誕生した。

また、年1回、順天堂大学大学院、福岡大学大学院の教員、院生との交流会を行い、現状や課題などを共有、意見交換を行うなど、交流を図っている。

4. 評価および次年度の課題

昨年度に引き続き、リカレント教育やケア検討会はオンラインでの開催となったが、十分に事業への参画や学習会の開催を企画・運営することができた。今後の運営方法については、オンライン開催だけでなく、状況に応じてハイブリッド型の運営も検討していく。また、研究成果を公表することが十分にできていないことが領域としての課題であり、工夫をして研究に取り組む時間の確保をしていく。

<小児看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) 小児看護学領域に携わる大学院在學生・修了生の交流会

本年度の交流会は、オンライン会議システムを活用した Web 開催とし、7月17日(日)看護開発研究会が終了した午後に実施した。大学院在學生、修了生ならびに教員を含めた16名の参加が実現し、現在取り組んでいることなどの近況報告や意見交換をすることができた。また、オンラインでの参加が難しかった修了生のうち、近況報告として預かったメッセージを紹介することを通して、修了生間の豊かな交流の場をもつことができた。次年度は、対面が可能となれば対面による交流会を開催していきたい。

2) 小児看護学領域事例検討会

修了生や大学院在學生を対象として、例年、年3回程度開催していたが、COVID-19の感染予防および拡大防止対策として、学外者が参加しての対面での会合等は原則開催しないという全学的な方針に従い、開催を中止した。オンライン会議システムでは、個人情報漏洩の危険があるため、個人情報を保護した情報共有の方法を含め、今後の開催方法について検討していく予定である。

3) 高知医療センター・高知県立大学包括連携事業

(1) 継続教育支援 (12/23・2/24)

毎年、高知医療センターすこやかAフロアと連携して実施計画を立案し、教育支援を行っている。本年度の教育支援では、新人看護師を対象とした「けいれんの子どもへの対応」をテーマに、シミュレーション勉強会を行った。COVID-19の感染状況に応じて開催日時を調整し、感染拡大が落ち着いた12月と2月に勉強会を行った。それぞれ4~5名の看護師と副科長が参加し、複数の場面を通してけいれん時の子どもへのケアについて参加者同士で意見交換を行うとともに、知識に基づくけいれんへの適切なケアについても話し合う機会となった。次年度の継続教育支援については、部署のニーズに応じた教育支援を立案し、実施していく予定である。

(2) 臨床実践能力及び実践モデル等の開発・検証に関する共同研究

開催日時：Zoomによるオンライン開催

(5/14・7/2・7/24・8/28・10/8・11/13・12/17・12/26・1/29)

開催場所：高知県立大学看護学部または研究メンバー職場・自宅、高知医療センター

参加人数：17名(医療センター2名、県大12名)

内 容：「命に向き合う子どもと親のエンド オブ ライフへの看護支援モデルの構築と活動」(研究代表者：中野綾美)における、家族を対象とした研究をNICU・GCU、小児病棟の看護師とともに共同研究を実施している。研究成果として、看護師を対象としたインタビュー調査の分析結果を日本家族看護学会第29回学術集会にて示説発表(1本)、日本小児看護学会第32回学術集会にて示説発表(1本)した。

(3) 出前講座

開催日時：令和4年10月23日(日)

開催場所：宿毛市立橋上小学校(現地開催)

参加人数：小学生11名、教職員8名、保護者15名

内 容：「子どもの健康とヘルスリテラシー」と題して、出前講座を開催した。出前講座では、子どものヘルスリテラシーがどのように育まれるのかを説明した。次に、健康課題として、スマホやタブレットを使用することによる悪影響について説明し、家族ごとに理解したこととその対策について検討していただいた後、お互いに発表して理解を深めた。

(4) 赤ちゃん同窓会

本年度もCOVID-19拡大により開催中止となった。

(5)小児看護の魅力を語る会

8月に開催予定であったが、COVID-19拡大により中止となった。来年度に向け、オンライン会議システムを活用した方法やハイブリッド型の運営による開催を検討していく。

2. 研究活動

1)教員の研究活動

小児看護学領域では、各教員が研究代表者(基盤研究 B、基盤研究 C)として、また共同研究者として科学研究費助成金を受けて研究活動に取り組んでいる。「命に向き合う子どもと親のエンド・オブ・ライフへの看護支援モデルの構築と活用」(研究代表者：中野綾美 2017年 - 令和4年)、「家族との協働型エンドオブライフケア実践能力を高める看護遠隔教育プログラムの開発」(研究代表者：中野綾美 2021年 - 2024年)、「医療的ケアが必要な在宅療養中の子どもと家族の災害に備えた協働支援プログラムの開発」(研究代表者：佐東美緒 2017年 - 令和5年)、「成人期に移行する先天性心疾患と共に生きる子どもと親の軌跡を説明できるモデルの構築」(研究代表者：高谷恭子 2019年 - 令和5年)、「血液・腫瘍疾患を持つ青年のSDMを支援する高度実践看護師の教育プログラムの開発」(研究代表者：有田直子 2019年 - 令和5年)、「生体肝移植を受けた子どもの心理・社会的フォローアップケアガイドラインの開発」(研究代表者：田之頭恵里 2020年 - 令和5年)に取り組んでいる(詳細は教員の活動、研究に関する報告参照)。

また、他大学との共同研究、ならびに、科学研究費助成金以外の外部資金を得た共同研究にも取り組んでいる。

2)修士論文・博士論文の公表

令和4年度公表された修士論文、博士論文については以下に記す。

【博士論文】

- ・嶋岡暢希,中野綾美(2022):乳児期の子どもを育てる父親の Mastery・属性との関連,高知女子大学看護学会誌,47(2),pp.63-75

3. 教育活動

本年度も COVID-19 拡大に伴い、講義科目はオンデマンド型の遠隔授業や対面授業とのハイブリッド型授業を展開し、事前課題や事後課題を設けて学生たちの主体的な学びとなるように工夫するとともに、リアクションペーパーを活用した学生と教員との対話に努めた。看護実習では、臨地での実習が行えなくなることを見据え、学内実習が臨地実習の連続線上の学びとなるように、病院施設側との WEB 会議システムを活用したカンファレンスの充実、ならびに、動画学習やロールプレイなどの体験学習の組み入れ、さらにゲストスピーカーとして乳幼児期の子どもを育てるご家族と WEB 会議システムを介したディスカッションの機会を得ることを通して、実習目的を達成することができた。

4. 活動の評価

本年度も COVID-19 拡大に伴い、高知医療センターと共催で開催している赤ちゃん同窓会や、専門職者や修了生を対象とした事例検討会を開催することができなかったが、感染拡大が落ち着いた 12 月と 2 月に「けいれんの子どもへの対応」をテーマにシミュレーション勉強会を開催した。今後の社会貢献活動の運営方法については、感染状況に応じて、オンライン会議システムの活用ならびに、ハイブリッド型の運営も検討するなど、参加者の安全に考慮し、継続可能な方法を検討していく。また、COVID-19 拡大や遂行困難な状況に見舞われたため、進捗状況に遅れが生じていることは課題である。

5. 次年度の課題

社会貢献活動については、オンライン会議システムの活用により遠方の修了生や専門職者が参加しやすくなるという利点があるため、COVID-19 の感染状況に応じて、オンラインを含めたハイブリッド型の運営を検討していく。

研究活動に関しては、修了生の論文投稿の支援および教員の論文投稿に取り組んでいくとともに、各教員または共同研究として取り組んでいる研究活動の推進に力を注いでいくことが課題である。

<母性・助産看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会

話題提供者より「長期入院となった切迫早産妊婦へのケア」について事例を提供いただき、母性・助産看護に携わる助産師 17 名が参加し、事例検討を行った。切迫早産徴候が進むことでストレスを抱える妊婦に対する看護について、参加者が勤務する各病院施設での切迫早産妊婦へのケアの現状を振り返りながら、看護する中での工夫していることなどを共有した。

コロナ流行下の各病院施設における面会制限の状況や、その中で家族への関わりの難しさ、長期入院が必要な妊婦および家族、分娩期にある産婦および家族へのケアについて共有する貴重な機会となった。コロナ感染症対策として Web 会議システムを用いて行い、概ね問題なく進行できた。

2) 令和 4 年度母性・助産看護学領域交流会

Web 会議システムを使用して交流会を行った。県内外より卒業後 1~3 年目の 6 名が参加し、近況報告および現行での看護実践について共有を行った。

2. 学習会

母性・助産看護学に関する学習会を、Web 会議システムにて、本年度 9 回開催した。県内外の助産師、母性・助産領域教員(他大学含む)の参加があった(各回 3~5 名の参加)。先行研究や実践での看護活動を通して、下記をテーマに意見交換を行った。

[第 1 回] 令和 4 年 4 月 6 日 「Research Question について考える」

[第 2 回] 令和 4 年 5 月 11 日 「アンコンシャスバイアスについて考える」

[第 3 回] 令和 4 年 6 月 1 日 「遠隔による看護の可能性」

[第 4 回] 令和 4 年 8 月 3 日 [夫婦の coparenting]

[第 5 回] 令和 4 年 9 月 7 日 [アンコンシャスバイアスへの助産師による支援]

[第 6 回] 令和 4 年 11 月 2 日 [助産師の技術]

[第 7 回] 令和 4 年 12 月 7 日 [男性の育児休暇取得]

[第 8 回] 令和 5 年 2 月 1 日 [助産師が認識する気がかりな母子への支援]

[第 9 回] 令和 5 年 3 月 1 日 [看護実践の語り合い]

3. 研究活動

母性・助産看護学領域では、それぞれの教員が科学研究費の助成を受け研究活動に取り組んでいる。2018 年度から「ICT を用いた妊婦の災害への備えを促進するための介入の効果検証」(研究代表者: 渡邊聡子)、2021 年度から「周産期医療施設における両親を対象とした妊産婦健診ケアモデルの開発と検証」(研究代表者: 嶋岡暢希)、令和 4 年度から「Family Confidence を高める乳児家族ハイブリット型看護介入モデル開発」(研究代表者: 岩崎順子)、2017 年度から「妊娠期ケアにおける臨床判断に関する現任教育プログラムの開発」(研究代表者: 西内舞里)の研究に取り組んでいる。

領域に関連する研究成果として、母性衛生に 1 本、高知女子大学看護学会誌に 3 本、高知県立大学紀要に 2 本投稿した。また、日本災害看護学会第 24 回年次大会に 1 本、第 3 回日本看護シミュレーションラーニング学会学術集會に 1 本、日本小児看護学会第 32 回学術集會に 1 本、第 36 回日本助産学会学術集會に 1 本発表した。

<老人看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) 日本災害看護学会第24回年次大会

令和4年9月3日(土)、「今、改めて準備期の災害看護を考える―住み続けられるしくみづくりのために―」をテーマにハイブリッド開催をした。

2) 日本老年看護学会 CNSCN 交流会

令和5年2月12日(日)13:00~16:30、一般社団法人日本老年看護学会 専門看護師・認定看護師活動推進委員会主催の「高齢者に対する共同意思決定支援に対する共同意思決定支援」をテーマにWeb開催され、老人看護学領域がWeb中継を担当した。

3) 看護相談室(ケア検討会)

老人看護学領域ケア検討会を6月と11月に開催した。大学院生、修了生、地域の看護職の方などがWEB上で集まり、高齢者の事例を通して看護支援について検討した。

第1回目は、手術後せん妄症状が出現した高齢患者事例を通して退院後を見据えて、何を視野にアセスメントするかについてディスカッションを深めた。

第2回目は、食欲不振と炎症反応が出現した認知症高齢者事例を通して、退院後も見据えた状況のアセスメントと、入院中からの継続した支援についてディスカッションを深めた。参加者の方からは、自宅での支援について勉強になった、高齢患者の現状や今後起こりうること、必要なケアについて、ご家族が理解できるように一緒に考えていくことが大切だと改めて感じた、など意見があった。

4) リカレント教育

今年度は、「どうする Gero CNS !?」をテーマに、修了生・在学生から、最近/この1年の活動状況、ちょっとチャレンジ始めてみていることや目下の課題などについて、個々に話題提供をいただいた。

修了生からは、CNSとしての視点で日々の活動に携わる中、今対応しているケースや組織内での役割期待などについて、活発な質疑・意見交換が交わされ、課題を共有した。認知症ケアに対する現職教育について、新人看護師への教育の工夫や熟練看護師の実践知を可視化していくこと、看護師のマインドを促進していくことなど、個人、組織、地域への働きかけの必要性を再認識することができた。さらにCNSとして、院内だけでなく地域や他機関での活動の場が増えていること、全国あるいは近畿の老人看護CNSとの事例検討会にも積極的に参加することで多くの学びがあること、学会参加も積極的に行っていることについても共有された。

2. 研究活動

「急性期病院に入院中の認知症高齢者に対する効果的ケア・パッケージの開発」(2019~令和4年、基盤研究C、研究代表者、竹崎久美子)に取り組んだ。本年度は、作成したケア・パッケージ(案)について、看護師を対象に病棟での実施が可能か否かの意見をいただくインタビューを行い、ケアパッケージ案の内容に反映させて洗練化した。来年度は、CNSやCNを対象にインタビューを実施したいと考えている。

3. 教育活動

今年度は、Covid-19感染拡大の影響により、講義科目において、前期後期ともに状況に応じて対面授業をベースとしたハイブリッド型の授業を展開した。老人看護援助論では、ゲストスピーカー2名による講義も開催した。

4. 評価

COVID-19禍においても、オンラインによる交流会やハイブリッド型授業など方法を工夫しながら柔軟に活動することができた。また、今年度は日本災害看護学会年次大会の開催や日本老年看護学会委員会の活

動など、領域として社会および学術貢献活動を関連機関や関係する方々と連携しながら遂行することができた。

5. 次年度の課題

次年度も引き続き、社会活動および学術活動を行っていき地域の看護職の方の参加が増えるように活動を継続する。研究活動については、ケアパッケージ案の確定に向けてインタビューデータをまとめる。研究成果を公表できるようにしたい。

<精神看護学領域>

1. 活動

1) 社会貢献活動

(1) 看護相談室(ケア検討会)

本年度も、高知県在職の精神看護専門看護師有志の会である「高知精神看護専門看護師の会」と協働し、専門看護師の実践能力の質の向上を目的としたケア検討会を4回実施した。

① 第1回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

日 時：令和4年6月16日(木) 19:00-21:00

場 所：高知県立大学看護学部棟 C326、Web 開催

参加者：14名(本学大学院生2名、本学大学院修了生5名、他大学大学院修了生3名、教員4名)

内 容：「CNSと組織」をテーマに、地域における組織の位置づけや組織の中でのCNSの位置づけ、役割やチーム作りについて報告いただいた。「組織を活かす」「組織で生きる」ことに焦点をあて、臨床の活動内容を交えて活発な意見交換がなされた。CNSとしての経験を重ね、組織に定着していくなかで、多様な役割や活動への拡がり、個々のCNS像を形作っていく様子がうかがえた。また、その活動をプレゼンテーションする発信力の大切さを実感する機会となった。

② 第2回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

日 時：令和4年9月15日(木) 19:00-21:00

場 所：高知県立大学看護学部棟 C326、Web 開催

参加者：15名(本学大学院生4名、本学大学院修了生4名、他大学大学院修了生3名、教員4名)

内 容：「コンサルテーション」をテーマに、コンサルテーション事例のロールプレイ再現動画を共有し、意見交換を行った。「ケース中心のコンサルテーション」を行いつつも、コンサルタントの脳裏にはコンサルティの背景や病棟における立場、関係性、病棟や看護の力量など、多岐に渡り情報を収集し、分析している様子がうかがえた。コンサルテーションの評価についても、初回面接時の構造化や終了時のコンサルティの感想を聞くこと、その後の経過を把握するためにコンタクトをとるなどの実践についても共有し、多くの学びとなった。

③ 第3回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

日 時：令和4年12月24日(土) 10:00-12:00

場 所：高知県立大学看護学部棟 C326、Web 開催

参加者：13名(本学大学院生3名、本学大学院修了生3名、他大学大学院修了生2名、他大学教員1名、教員4名)

内 容：「家族看護」をテーマに、組織における家族看護の実践状況や考え方について紹介があった後、家族看護を組織のなかに取り入れるための教育活動について意見交換を行った。CNSは家族に直接ケアを提供しつつ、病棟看護師には家族看護の視点を投げかけ、ケアの意味づけを行なう役割があることが共有された。組織のなかになら新たな考え方を導入していくには、長期的な目標と短期的な目標の両方を立て、具体的なアウトカムを示す力も必要であることが改めて学びとなった。

④ 第4回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

日 時：令和5年3月16日(木) 19:00-21:00

場 所：高知県立大学看護学部棟 C326、Web 開催

参加者：14名(本学大学院生3名、本学大学院修了生5名、他大学大学院修了生2名、他大学教員1名、教員3名)

内 容：「職員のメンタルヘルス支援」をテーマに、事例を振り返り、組織におけるCNSの役割と機能について意見交換を行った。CNSは職員のセルフケアを維持するために医師と連携し危機介入を行い、再び就業に取り組めるよう管理者や看護部、家族とも調整を図り、復職

への適応支援を行っていた。多くの CNS が組織において、CNS の役割だけでなく、教育や管理などの役割を持ちながら働いており、立場や役割が曖昧になることがある。スタッフに関わる職員も階層的であり、変遷する状況のなかで、CNS は調整の目的や目標、立場や役割を明確にすることの重要性を改めて認識する機会となった。

(2) 精神看護領域に携わる卒業生・修了生の交流会

日本精神保健看護学会学術集会の開催に合わせ交流会を実施してきたが、令和3年度に続き、令和4年度も COVID-19 の感染予防のため中止した。次年度以降の開催については COVID-19 の感染状況を踏まえつつ、卒業生・修了生との交流を深める機会を設けたいと考える。

(3) リカレント教育

本学健康長寿センター・日本精神科看護協会高知県支部との共催で高知県西部地区研修会を企画し準備を進めていたが、COVID-19 の感染拡大に伴い中止となった。

(4) 精神科病院におけるボランティア活動

高知県内の精神科病院が行う催し物に、学生がボランティアとして参加していたが、COVID-19 の影響で病院側からのボランティア募集がなく、活動は実施していない。次年度もボランティア参加の可否については検討していき、学生が主体的に精神障害をもつ人との交流が持てるよう環境を整えていく。

2) 研究

(1) 教員の研究活動

精神看護学領域では、それぞれの教員が研究助成を受け、研究に取り組んでいる。「認知症の人と家族の伴奏を支援する家族看護援助モデルの開発」(科学研究費助成金 研究代表者：田井雅子 2021-2024 年度)、「統合失調症患者の在宅生活を支援する看護師の交渉コンピテンシー育成プログラムの開発」(科学研究費助成金 研究代表者：藤代知美 2018-令和4年度)、「精神科未治療・治療中断者の受療行動を促す地域協働型交渉スキル習得プログラムの開発」(科学研究費助成金 研究代表者：藤代知美 2022-2025 年度)「せん妄を誘発する環境要因と予防のための病棟環境整備ガイドラインに関する基礎的研究」(科学研究費助成金 研究代表者：中井有里 2022-令和5年度)、「双極性障害をもつ人と家族へのメンタルヘルスリテラシー獲得・向上のための看護方略」(科学研究費助成金 研究代表者：池内香 2022-令和5年度)、「メンタルヘルスの課題を抱える人と支援者のつながりの構築」(高知県立大学戦略的研究推進プロジェクト 研究代表者：藤代知美 2021-令和4年度)に取り組んでいる。

研究成果として、高知女子大学看護学会誌に原著論文 1 編の論文投稿を行った。学会発表では、第 25 回日本地域看護学会学術集会にて 1 編の発表を行った。

(2) 大学院生の学会発表支援

高知女子大学看護学会誌 47 巻 2 号にて博士後期課程在学学生、48 巻 1 号にて博士前期課程修了生の投稿支援を行った。博士後期課程修了生の専門学会への投稿支援を行った。

2. 評価と次年度の課題

COVID-19 の影響により、地域の施設との交流や教育の機会を実際にもつことはできなかったが、リカレント教育における準備段階で、地域の教育ニーズを知ることができた。

看護相談室は、今年度も Web を活用することで、4 回開催することができ、Web 開催により、遠方の修了生も参加が可能となり、他大学院修了生も加わって、開催することができた。今後も、参加者のニーズに応じたテーマや開催方法などを検討していく。

また、修了生の学会発表や論文投稿の支援を行っていく。

<家族看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会

今年度も COVID-19 の感染拡大防止に伴う本学の方針により、学外者の構内立ち入り制限が継続されていたため、開催を中止した。

2) リカレント教育

大学院修了生への継続的なサポートの一環として、リカレント教育を実施した。年度当初に年間 8 回の開催計画を提示し、修了生から提供された事例についての事例検討 4 回と、教員によるテーマに関する講義とディスカッション 4 回を交互に企画、毎月第 3 金曜日に Web ミーティングツールを活用し実施した。

事例検討会では、修了生から、様々な年代や家族構成、多様な健康問題とそこから派生する課題をもつ対応の難しい家族の事例を提供していただき、検討を行った。家族看護エンパワーメントモデルの視点を活用しながら家族の体験の理解と家族アセスメントを行い、事例提供者から提示されたディスカッションポイントをふまえて、事例家族への看護支援の方略を検討した。家族に対するダイレクトケアだけでなく、医療チームへの働きかけや院内外の多職種との協働における看護者の役割など、様々な視点からディスカッションを行った。事例を提供してくれた修了生にとっては実践の振り返りの機会となり、参加者にとっては困難事例への CNS の看護介入の技を学ぶ場となった。

理論や最新の家族看護の動向についての講義とディスカッションでは、家族看護の基盤となる 2 つの理論(家族システム理論、家族発達理論)を取り上げ、模擬事例や映画に登場する家族の事例を使って改めて理論への理解を深めた。最新の家族看護の動向では、「ダブルケア」に関する現代社会の状況や政策などをふまえて家族看護の視点からの取り組みを考えたり、「家族支援における倫理調整」について研究結果をふまえて具体的な家族支援の方略や倫理調整力を高める方法に焦点を当てて意見交換を行ったりした。

Web ミーティングツールを用いた開催は 3 年目となり、遠方の修了生も負担なく参加でき、年間計画を年度当初に掲示したことで勤務調整もしやすくなり、有効であった。

【第 1 回】

日 時：令和 4 年 5 月 20 日(金)18：30～20：40

参加者：修了生 7 名、大学院在学学生 2 名、教員 4 名

テーマ：理論で遊ぼう① 家族システム理論

講 師：中井美喜子

【第 2 回】

日 時：令和 4 年 6 月 17 日(金)18：30～20：40

参加者：修了生 4 名、大学院在学学生 2 名、教員 4 名

事例検討：精神的な不安定さを抱える妊産婦の家族の事例

事例提供者：修了生

【第 3 回】

日 時：令和 4 年 7 月 15 日(金)18：30～20：30

参加者：修了生 5 名、大学院在学学生 2 名、教員 4 名

テーマ：社会の変化と家族の変化と家族看護のあり方(ダブルケア)

講 師：長戸和子

【第 4 回】

日 時：令和 4 年 10 月 15 日(金)18：30～20：30

参加者：修了生 4 名、大学院在学生 1 名、教員 4 名
事例検討：退院後に医療者への不満を表出する家族の事例
事例提供者：修了生

【第 5 回】

日 時：令和 4 年 11 月 18 日(金)18：30～20：35
参加者：修了生 4 名、大学院在学生 1 名、教員 4 名
テーマ：理論で遊ぼう② 家族発達理論
講 師：坂元綾

【第 6 回】

日 時：令和 4 年 12 月 16 日(金)18：30～20：30
参加者：修了生 2 名、教員 4 名
事例検討：虐待が疑われる家族の事例
事例提供者：修了生

【第 7 回】

日 時：令和 5 年 1 月 20 日(金)18：30～20：30
参加者：修了生 3 名、大学院在学生 1 名、教員 4 名
テーマ：家族支援における倫理調整
講 師：瓜生浩子

【第 8 回】

日 時：令和 5 年 2 月 17 日(金)18：30～20：30
参加者：修了生 3 名、教員 4 名
事例検討：低酸素脳症により介護が必要となった壮年期患者の家族の事例
事例提供者：修了生

2. 研究活動

1) 教員の研究活動

家族看護学領域では、それぞれの教員が研究代表者として、また、相互に共同研究者として科学研究費助成金を受けて研究活動に取り組んでいる。「慢性心不全患者・家族のアドバンス・ケア・プランニング支援ガイドラインの開発」(研究代表者：長戸和子、2020～令和 4 年度)、「患者・家族と看護者間のコンフリクトの発生・悪化を予防する教育プログラムの開発」(研究代表者：瓜生浩子、2020～令和 5 年度)、「2 型糖尿病患者の足病変予防のセルフモニタリング促進看護支援ガイドラインの開発」(研究代表者：坂元綾、2021～2025 年度)、「人工呼吸器を装着した児と家族のヘルスケア機能を増進するためのケアガイドライン開発」(研究代表者：中井美喜子、2019～令和 4 年度)、「家族看護実践における倫理調整力強化のためのモデルと教育ツールの開発」(研究代表者：瓜生浩子、2017～令和 4 年度)に取り組んでいる。

研究成果として、『Healthcare』に 1 編、家族看護学研究に 1 編、高知女子大学看護学会誌に原著論文 1 編、研究報告 1 編、高知県立大学紀要に 1 編の論文投稿を行った。学会発表は、第 16 回日本慢性看護学会学術集会 1 題、日本家族看護学会第 29 回学術集会 1 題、EAFFONS 25th East Asian Forum of Nursing Scholars Conference 1 題、日本災害看護学会第 24 回年次大会 1 題、第 54 回高知県リハビリテーション研究大会 1 題の発表を行った。

3. 活動の評価

今年度も昨年に引き続き、COVID-19 の影響により地域の専門職者を対象とした事例検討会を開催することはできなかったが、修了生対象のリカレント教育を定期的に開催した。年度当初に年間計画を提示することで、予定を立て、自己のニーズに添った回に参加することができたのではないかと考える。

家族支援専門看護師の資格を有している修了生の参加は、相互研鑽や情報交換の機会としても位置づけることができた。家族支援専門看護師の資格取得を目指す修了生にとっては、家族アセスメント力の強化や広い視野から家族への看護支援の方略を検討し展開していく能力を高める機会となり、在学生にとっては、修了生の家族看護実践の実際やその中での課題を知り、ロール・モデルを得る機会となった。

研究活動に関しては、定期的なミーティングの開催や研究成果発表が十分に出来なかったため、次年度の課題として取り組んでいく。

4. 次年度の課題

リカレント教育は次年度も継続する。大学で開催する方法より、Web ミーティングツールの活用の方が遠方の修了生が参加しやすくなるので、引き続き活用しながら実施することを考えている。また、地域の看護者とのケア検討会は3年間中断しているため、次年度は開催を再開していきたい。

研究活動に関しては、修了生の論文投稿の支援および教員の論文投稿の促進、修了生との共同研究などに取り組んでいく。

<在宅看護学領域>

1) 社会貢献活動

1) 修了生 Web 交流会

リカレント教育の一環として、Web にて交流会を開催した。

日時:令和 4 年 8 月 26 日(金)18:30~20:30

参加者:在宅看護学領域修了生 4 名 博士前期課程学生 2 名 教員 5 名 計 11 名

県内外の病院、訪問看護ステーション、教育機関など様々な場で活躍している修了生の参加があった。それぞれが得意分野や精力的に取り組んでいることの情報発信しながら交流を深め、お互いの困りごとの解決に向けて、ディスカッションすることができた。

開催日は COVID-19 第 7 波の最中であり、参加者の関心が高かった在宅療養における COVID-19 陽性者への対応方法について情報共有と検討を行った。また、訪問看護ステーションでのキャリア支援について、当大学健康長寿センターで行っている「訪問看護師スタートアップ研修」や、参加者の体験をもとに検討を行った。

2) ケア検討会

看護学部看護相談室事業として、在宅看護学領域ケア検討会を 2 回実施した。いずれも Web にて行い、県内外からの参加があった。また、訪問看護ステーションに勤務する理学療法士の参加もあり、同じテーマに沿って、職種を超えて意見交換を行うことができた。

①第 1 回

日 時:令和 4 年 11 月 17 日(木) 18:30~20:00

参加者:9 名

訪問看護師 4 名(うち専門看護師 3 名)、

訪問看護ステーションに勤務する理学療法士 1 名、本学大学院生 1 名・教員 4 名

テーマ: COPD をもつ療養者のライフスタイルの尊重と生活調整に向けたケア

内 容: COPD(慢性閉塞性呼吸器疾患)で在宅酸素療法中の療養者の事例をもとに、ライフスタイル変容に関する本人の意思決定を尊重することや、家族や多職種を巻き込んだ支援体制作りについてディスカッションした。現時点だけでなく、長期的な視点を持ち、人生の最終段階の療養についても本人家族、医療・ケアチームで事前に話し合うことなど、ケアの視点の広がりを得ることができた。

②第 2 回

日 時:令和 5 年 2 月 16 日(木) 18:30~20:30

参加者:14 名

訪問看護師 4 名(うち在宅看護専門看護師 2 名)、病院看護師 3 名、

慢性疾患看護専門看護師 1 名、社会福祉士 1 名、本学大学院生 1 名、教員 4 名

テーマ: 終末期にある本人と家族の合意に向けた ACP

内 容: 積極的ながん治療を中断して在宅療養の継続を希望する療養者と、治療の継続を希望するご家族との合意形成に向けた関わりについて、それぞれの職種や専門領域ならではの視点やアセスメント、関わり方を共有しながらディスカッションを行った。
終末期という時間的制約のある中で、家族すべてが合意した共同意思決定を目指すだけでなく、ケアチームのそれぞれの職種が、家族で互いの真意に触れるきっかけを作り、分かち合うことで現状理解を深め、見通しがもてるように関わることも意思決定を支えていくことになることと話し合った。

3) 健康長寿センター事業の展開

以下の健康長寿センター事業に領域教員が中心となって事業展開を行なった。なお、詳細の事業報告

は、第1部「10.健康長寿センターにおける看護学部の活動」にて報告している。

(1) 高知県民の皆様に対し健康長寿を啓発する活動(域学共生)

①地域ケア会議推進プロジェクト

(2)高知県の医療・健康・福祉政策課題を解決する活動

①中山間地域等訪問看護師育成講座

②高知県介護職員喀痰吸引等研修

③退院支援体制推進事業

(3)高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動

①地域ケア会議コンサルテーション事業

4) 中央西福祉保健所管内地域包括ケアシステム構築への支援

中央西福祉保健所管内地域包括ケアシステム構築に向け、公立病院連絡会、中央西在宅医療連携委員会等にてアドバイザー等として参画し、支援を行なった。

2) 研究活動

1) 研究発表

(1)論文発表

高知女子大学看護学会誌に1件、高知県立大学紀要に1件、四国公衆衛生学会雑誌に1件の論文発表を行った。

(2)学会発表

第42回日本看護科学学会で1件、第53回日本看護学会で1件、日本災害看護学会第24回年次大会で1件、第29回日本家族看護学会学術集会で1件、日本小児看護学会第32回学術集会で1件の発表を行った。

2) 活動中の研究

科学研究費助成事業(以下、科研)では、研究代表者として6件、学内の戦略的研究推進プロジェクトとして2件の研究を行っている。

(1) 科研

課題名	期間	代表者
慢性心不全高齢者の再入院を予防するシームレスケアを創る退院支援ガイドラインの開発	2018.4.1- 2022.3.31	森下安子
慢性閉塞性肺疾患患者の再入院予防の地域病院多職種協働型入院支援ガイドライン開発	2022.4.1- 2026.3.21	森下安子
組織学習を支える訪問看護管理者のコンサルテーション力を高める教育支援モデル構築	2020.4.1- 2023.3.31	森下幸子
学童期にある発達障害児の家族の家族ストレスを促進するケアプログラムの開発	2020.4.1- 2024.3.31	源田美香
慢性疾患患者を支える外来看護師のアセスメント能力を育成する教育プログラムの開発	2019.8.30- 2023.3.31	竹中英利子
慢性腎臓病患者のサインマネジメントを支援する外来看護師教育プログラムの開発	2021.4.1- 2025.3.31	竹中英利子

(2) 戦略的研究プロジェクト

課題名	期間	代表者
高知市「入退院引継ぎルール」を活用した医療機関における退院支援展開のマニュアル作成	2020.4.1- 2022.3.31	川上理子

ヤングケアラーとその家族の家族レジリエンスを高める看護ガイドラインの作成	2022.4.1- 2024. 4.1	森下幸子
--------------------------------------	------------------------	------

また、在宅看護学領域、地域看護学領域、家族看護学領域、看護管理学領域、小児看護学領域、災害看護学領域の科研の研究分担者として 11 件に参画している。

3) 評価

今年度は、Web 会議システムを活用し修了生交流会とケア検討会を計 3 回開催することができた。本来 COVID - 19 対策であったが、参加のための移動の負担が少なく、県外からの参加もあり、幅広い交流や多彩な情報交換を行うことができた。また、ケア検討会では模擬事例の検討となったが、社会のニーズに合ったテーマ設定が可能なことや、事前に事例共有できることで、有益なディスカッションにつながったと考える。

健康長寿センターの事業展開では、コロナ禍においても感染対策を徹底した上で実施できた。

研究活動では、コロナ禍において昨年に引き続き進捗が遅れる傾向にあり、感染が収まっている時期にデータ収集等、速やかに動けるようさらに領域で協力して進めていく。

4) 次年度の課題

- ・次年度は教員構成が変更になる。これまで培ってきた知識や経験を活かしながら、新たな体制やネットワークを構築し、活動を継続できるよう取り組む。
- ・在宅ケアを担う専門職のニーズに応じた情報交換やケア検討会の企画を継続する。
- ・科研等、研究活動を計画的に進める。

<地域看護学領域>

1. 社会貢献活動

1)高知県保健師人材育成

高知県保健師人材育成プログラムは、高知県健康政策部保健政策課と協働で取り組んでいる。5)高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動参照。

(1) 新任期保健師育成に係わる OJT 担当者会

プリセプターや管理者を対象にした研修では、プリセプター能力育成研修として、年に2回実施した。研修では、高知県新任期保健師支援プログラム Ver.3 の説明と共に、目標管理、組織管理や人材育成を効果的に実施するための講義と、「管理期・プリセプターの役割」に関する講義を行った。第2回プリセプター能力育成研修は、プリセプター、管理者、研修担当者が、令和4年度の人材育成について各市町村の評価を共有し、評価視点に沿って総合的に評価し、中堅期保健師研修会等今後の取り組みについて検討した。

① 令和4年5月13日(金)13:30~16:30 参加者:58名

講義 「『新任期保健師支援プログラム』行動目標とは何か」 川本美香
「管理者・プリセプターの役割」 小澤若菜

② 令和5年3月13日(月)14:00~16:30 参加者:31名

ガイドラインを活用した新任期保健師人材育成の取り組みの評価
保健師育成の評価等についてのグループワーク・意見交換のサポートおよび助言:小澤若菜・川本美香・高橋真紀子

(2)福祉保健所管内新任期保健師研修

福祉保健所が開催する管内新任期保健師・中堅期保健師の人材育成に関する研修では、集合研修の課題提出に向けたフォローアップとして個別課題の取り組み状況について確認を行った。また、プリセプターや管理者が支援する能力を高める講義やグループ討議での助言を行った。

中央東福祉保健所	11月8日(火)13:30~16:30 参加者:9名 3・4年目保健師 内容:講義・グループワーク・意見交換:川本美香
須崎福祉保健所	予定していたが新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため中止 高橋真紀子
幡多福祉保健所	管内新任保健師研修会 10月13日(木)13時30分~16時00分 参加者:13名 講義「保健師のプレゼンテーションスキル向上について」 講師 小澤若菜

2)地域保健活動支援

高知県健康政策部保健政策課・福祉保健所地域支援室と協働し、各管内の地域保健活動の取り組みに関する研修会の講師や助言を行った。また、市町村が取り組む保健活動への参画、助言を行った。9~10月の期間に行う福祉保健所ごとの研修だが、本年も新型コロナウイルス感染症の感染拡大時期と重なった。そのため可能な限り日程変更し、講師としての参画を調整したが、日程調整が十分にできない状況があった。幡多福祉保健所では、新任期保健師のフォローアップ研修を、管内地域保健福祉活動報告会での発表準備や方法に活かせるように連動しながら企画実施した。事業等取組報告では、圏域の地域特性をふまえた保健と福祉に関連する保健事業の在り方について情報共有や意見交換を行う機会となった。

(1)高知県

幡多福祉保健所管内保健師研修及び地域保健福祉活動報告会

令和5年2月24日(金)10:30~16:00 報告8題 参加者27名 助言者 小澤若菜

(2)高知県保健師人材育成評価検討会

令和4年度の人材育成関係事業計画について、行政保健師確保対策について、その他情報共有および意見交換が令和5年3月15日(水)に開催され、参加した。

(3)津野町

第2期津野町健康増進計画中間評価に係る活動について、津野町が目指す「健康で笑顔あふれるまち」を実現するための4つの目標に関し、4回/年、主にデータ分析支援を行い、中間評価に参画した。

(4)高知県国民健康保険団体連合会保健事業支援評価委員会

計5回支援の評価委員会活動(準備会、評価振り返り含む)に評価委員として参加
個別支援：書面による個別支援、ハイブリット開催 計13自治体
集団支援：初回中止、第二回Web開催 計11自治体

3) 高知県看護協会が行う研修会への協力

高知県看護協会保健師職能研修会に協力した。この活動では、保健師と協働し、研修プログラムの概要と実施・評価・今後の展望を報告した。

令和5年2月5日(日)13時から16時30分 参加者：12名 川本美香

2. 活動の評価

地域貢献活動の**1)高知県保健師人材育成**、については、高知県保健師人材育成ガイドラインに基づいて、PDCAサイクルを運用している。アウトカム評価として、新任期の人材については、各自治体において、個人の目標達成を評価し、高知県が集約している。プロセス評価として、「保健師人材育成評価検討会」において、評価検討会を行っている。それらの評価結果を次年度の人材育成活動に反映させている。また、「高知県保健師人材育成評価検討会」において、関係者で、2回/年の会議を開催して、年間計画の検討と評価を行っている。昨年に引き続き、感染症流行は、出席の難しい参加者がいたため、文書による助言を行った。

地域貢献活動の**2)地域保健活動支援**、については、それぞれの活動ごとにアウトカム評価を中心にして、評価を行っている。3)高知県看護協会が行う研修会への協力については、今年度は管理期保健師に向け分散配置された保健師の専門性の明確化を含めた研修会の方法を伝え、各地域における取り組みに示唆を得た。

3. 今後の課題

地域貢献活動については、今後も地域の関係者とPDCAサイクルの運用全体について協働的に取り組む。協働的に取り組む中で、大学の貢献について継続的に検討をしていく。なお、次年度は、人材育成評価検討会にて、ガイドラインにおける人材育成の取り組みの進捗管理を行う予定である。研究活動については、各教員が取り組む研究活動について領域活動として、研究のための時間を確保していくこと、成果の公表を支援していくことを強化する。

<看護管理学領域>

1) 社会貢献活動について

(1) ケア検討会(看護相談室)

【第1回ケア検討会】テーマ「スタッフのモチベーション対策と管理者の関わり」

日時：令和4年6月17日(金)18:00～20:30 場所：オンライン会議(ZOOM)

参加者：25名(病院看護職12名、一般企業管理者1名、本学大学院生9名、教員3名)

内容：外来部門の再編後1年目の4月に部門責任者として異動となった管理者から提供された事例を通して看護管理者の役割について検討した。組織の編成後の環境に未だ馴染めないスタッフに対して丁寧に意見を聞き、スタッフのモチベーションが維持できるように関わり、環境を整備しながら日々管理をしている中の管理者としてのもどかしさが語られた。参加者からの事例提供者への肯定的なフィードバックを通して、組織編成後の評価(プロセス評価・アウトカム評価)に関する必要性や具体的な問題解決につなげるための方法論へと視点も広がった。院生からは事例に関連した論文2本【「民間病院看護部長がもつ部下の職務動機づけモデルの構成要素」、「病棟再編時の体験パターンによる看護職の分類とその特徴—クラスター分析から」】の紹介があり、文献を踏まえての意見交換も行われ、参加者からのアンケート結果からもスタッフのモチベーションを維持するための管理者の役割や行動を具体的事例から多角的な視点での学びにつながったことが確認された。

【第2回ケア検討会】テーマ「外部環境の変化に伴う看護管理者の役割～対応困難事例の患者・家族への支援を通して～」

日時：令和4年10月14日(金)18:30～20:30 場所：オンライン会議(ZOOM)

参加者：27名(病院看護管理者16名、一般企業管理者1名、本学大学院生7名、教員3名)

内容：地域包括ケア病棟に入退院を繰り返す患者・家族への支援のあり方について、事例検討を行った。国の医療制度の変化と共に、病院の機能分化も進み、「ときどき入院、ほぼ在宅」をささえる地域包括ケア病棟の役割機能とは？そこで働くスタッフにとっての「ときどき」と患者家族、そして在宅チームにとっての「ときどき」の捉え方のずれをどのように埋めていくのか。急性期病棟から移動してきたスタッフにとって、厳しいマンパワー体制の下で、在宅と同じケアを求められることへのストレスがやがて「対応困難な家族」というラベリングに変化する過程に、看護管理者はどのように関わればいいのか？等々の多様な視点で熱いディスカッションが行われた。参加者からは、急性期、回復期、地域包括ケア、外来部門、訪問看護ステーションの管理者としての立場、患者さんやご家族そして自部署のスタッフの思いの狭間で、葛藤したりモヤモヤしたりしている現状について、率直な意見交換があった。現場の生の声は、参加者の日々のケアへの振り返りを刺激し、活発な意見交換の場となった。

院生からは事例を別の視点から捉えるための文献の紹介「看護師の患者に対する陰性感情」「病院に勤務する看護師の組織阻害行動」があった。その後の質疑応答では、多くの管理職が、まずは、陰性感情を抱いている看護師に対して真摯に向き合う姿勢を大切にしていること、患者さんや家族への対応が第一であることは勿論であるが、スタッフ看護師の思いも大切に耳を傾けていること、入退院を繰り返す患者家族をネガティブな発言でラベリングするのではなく、そこに隠された両者のSOSに耳を傾けていく事、「困った患者さんは、困っている患者さん」と理解する視点が大切といった意見があり、参加者の深い学びにつながった。

(2) リカレント教育【第3回のケア検討会の位置づけ】

日時：令和5年2月23日(木)13:30～15:30 場所：オンライン会議(ZOOM)

参加者：20名 テーマ「コロナ禍でも大切にしたい看護」

感染指定医療機関の3名より、看護部門責任者・病棟責任者として大事にしてきたことや葛藤、今後の課題について情報提供があった。病院の役割・機能を果たすために看護部としての方針を示し、ネガティブになりがちな状況をいかにポジティブに転化していくか考え取り組まれたことやスタッフと看護について語り合うことを大切にしてきたこと、管理者として揺らがない看護観をもち様々な意見と真摯に向き合ってきたことなどが報告された。報告後の意見交換を通して、それぞれの管理者

が、熱い思いを持ち取り組まれ、その思いがスタッフに伝わり、このコロナ禍という危機的状況乗り越えることにつながった過程が共有された。

(詳細は学部の HP 参照：<https://www.u-kochi.ac.jp/~kango/category/r04-kanri.html>)

(3) 高知医療センターとの包括的連携事業

本年度は、看護管理学領域からは、継続教育支援としてマネジメントリフレクション(2回)、QCサークル活動コンサルテーション(オンライン会議システムとメール)を実施した。

(4) 健康長寿センター事業への参加

入退院支援事業の研修事業「管理者研修」「看護管理者研修」「入退院支援コーディネート能力修得研修」「入退院支援コーディネーターフォローアップ研修」「多職種協働研修」の企画運営に参画し、講師を務めた。詳細は、令和4年度健康長寿センター報告書にて報告している。

2) 研究活動について

看護管理学領域では、それぞれの教員が科学研究費の助成を受け研究活動に取り組んでいる。

3)抄読会

看護管理学領域専攻の博士前期、後期課程の学生と看護管理学領域の教員が中心となって、抄読会を週に1回実施している。本年度は、4月第1週より遠隔会議システムを活用して、精力的に実施し、夏季、冬季休業期間を除いて、2月末まで毎週継続した。プレゼンターは領域の博士前期課程の院生が中心になり、不定期に博士後期課程の学生も分担し、研究のレビューとクリティーク、実践への活用について活発に討議した。本年の対象論文は、30本、延べ参加者数は、198名であった。

4)評価

社会貢献活動の中で特に重視しているケア検討会に加えて、リカレント教育でもケア検討会で培った事例を中心に議論する形式を用いて「コロナ禍でも大切にしたい看護」について県下の看護管理者のネットワークを繋ぐことができた。ケア検討会の参加者も毎回20名を超え、活発な意見交換がなされた。

また、抄読会の運営については、教員が中心から博士前期課程の学生中心の主体的な取り組みに変化していったことが一番の成果といえる。

5)次年度の課題

参加者の多いケア検討会を基盤とし、災害看護領域で培ったネットワークとの連携を目指す。また、高知医療センター所属の院生が継続して在籍していることも強みと捉え包括的連携事業(QCサークル活動)や看護管理実習への拡がりも目指していく。

<共創看護学領域>

1. 本年度の活動総括

共創看護学領域は開設3年目をむかえ、博士前期課程2回生3名、博士後期課程4名が在学し学んでいる。初年度と同様に、新カリキュラムの運営と共に、学生の学修環境の整備を中心に行っていた。

令和4年度も、博士前期課程の学生2名が「COVID-19患者が入所する宿泊療養施設に従事した看護系大学院生が抱いた困難と成長」をテーマに取り組んだ研究を国際学会東アジア看護学研究者フォーラム(EFONS)へ投稿し採択されるなど、学生の自主的で活発な研究活動が展開されている。同時に、本年度修士論文に取り組んだ3名が大学の研究助成金に応募し、3名ともが研究助成金を獲得することができた。

また、今年度、博士前期課程を修了した学生3名のうちひとり、当大学の博士後期課程に進学し、さらに研究を発展させることを決めている。また、もうひとり、学際的な視点の強化をめざし、他大学の博士後期課程に進学し、情報学を専攻することを決めた。さらに、ひとは、臨床においてEvidenceを活用していくことや臨床の視点から研究を発信することを目指し、臨床に戻ることを決めている。今後は、ますますバラエティに富んだ研究方法を駆使できる領域集団が形成され、看護学の殻を打ち破るような研究を行い、広く社会貢献ができるようになって考えている。

1) 研究活動

(1) 博士前期課程修士論文

テーマ：療養型病院に入院中の高齢者における Impaired Skin Integrity

研究者：今中与主安

Impaired Skin Integrityの要因とされているものを生理学的指標で評価し、Impaired Skin Integrityとの関連を明らかにすることを目的に行った研究である。療養型病院に入院中の65歳以上の高齢者52名を対象として実施された。その結果、Impaired Skin Integrityの症状では紫斑が最も多くみられ、紫斑と関連するのは、年齢、糖尿病、認知症、TP値、皮膚弾力性を示す指標であることが明らかになった。高齢者の紫斑は、加齢に伴い真皮成分の減少・編成によって皮膚弾力性が低下し、軽微な外力で血管が破裂しやすくなり、くわえて運動機能や認知機能の低下によって、ものにぶつかる機会が増えたことにより生じるのではないかと考えられた。

テーマ：表情解析ソフトウェアで推定するインフォームド・コンセントにおける情報の理解度

研究者：岩本幸大

本研究は、インフォームド・コンセントの場面を想定して、表情解析ソフトウェア(AI)、生理学的指標、身体動作指標、主観的指標を用いて情報の理解度を推定するための基礎的な研究である。11名の大学生と24名の高齢者の協力を得て実施した。その結果、情報が難化すると、大学生ではHappy、Valance、うなずきが減少し、末梢血流量の増加と鼻部皮膚温の上昇を認めること、高齢者ではAngryとDisgustedが増加し、Scared、Surprised、Interest、うなずきが減少することなどが明らかになった。これらの結果より、若年層と比較すると高齢者の理解度を推定することは難しく、複数の指標による推定が望ましいことが考察された。

テーマ：看護師の専門的コミュニケーションスキルとしての沈黙

研究者：依岡美里

沈黙について、専門的コミュニケーションスキルとしての看護師の重要性の認識と実践の度を明らかにし、コミュニケーションスキルの修得度などとの関連性を明らかにすることを目的に行われた。5例のインタビューと丁寧な文献検討を重ねて、「看護師の専門的コミュニケーションとしての沈黙の質問紙」を作成、研究の承諾を得た15施設の看護師859名に質問紙を配布し、回収数は413部(回収率48.0%)であった。分析の結果、看護師は沈黙を専門的コミュニケーションとして用いていることが明らかとなり、加えて、沈黙は専門的コミュニケーションスキル全般の修得度と関連が強く、専門性の高いスキルであること

が見出された。また、看護専門領域による沈黙への意識や実施度の違いを明らかにし、沈黙は専門領域の特徴や文化などの影響も受けることが考察された。

(2) 教員の研究活動

テーマ：障害文化と健常文化を超えて共創する支援のパターンランゲージ

科研基盤研究(C) 2021 年－2024 年

研究代表者：畦地博子

本研究の目的は、障害者の多様性を認め、障害文化と健常文化を越えて共創する支援のあり方を探究することであり、多様性・文化の差異に配慮した優れた障害者支援(good practice)の実践知に内在しているパターンを明らかにし、説明力あるランゲージを提案することである。小児看護、精神看護、養護、老年看護などさまざまな看護領域の研究者と、文化人類学を専門とする研究者が学際的に協働して実施している。本年度は、研究倫理審査申請を行い承認を得て、データ収集を開始している。

テーマ：がん化学療法による手足症候群および爪囲爪炎の早期検出と新規外用剤による予防的介入

科研基盤研究(C) 2018 年－2021 年

研究代表者：池田光徳

がん化学療法薬であるマルチキナーゼ抑制薬の投与により高頻度に発症する手足症候群／爪囲爪炎病変の発症機序を、皮膚生理学的検査方法を用いて明らかにし、本症の最早期病変が何であるかを検討した。手足症候群／爪囲爪炎の発症を抑制するためには、どの時期にどのような看護介入を行うのが適切かを検討した。手足症候群／爪囲爪炎をモデルとして、看護師が皮膚をアセスメントする際に簡便かつ有用な手段を見出すことにより、EBNに基づいた看護技術を展開できるのではないかと考えた。

テーマ：ポータブルデバイスおよびA I アプリを用いたポスト・コロナにおける非対面型遠隔看護

科研基盤研究(C) 2021 年－2025 年

研究代表者：池田光徳

本年度は、感情認識 AI 解析による「腹痛」の感情値を中心に検討を進めた。詳細は今後公的に発表する予定である。

2. 本年度の評価と次年度の課題

博士前期課程第3期生3名は、修士論文において、自らの研究課題を明らかにするために、従来の研究手法等にとどまることなく新たな発想で研究に取り組み、質の高い修士論文を作成した。博士後期課程の学生は、1名が中間報告を、1名が研究計画審査を終え、2名が本年度研究計画書を提出している。来年度も博士前期課程、後期課程ともに、学生が増える予定である。今後も、教育、研究(学生および教員)を遅滞なく推進する。また、令和4年度は特筆すべき社会貢献がなく、今後は領域としての社会貢献についても検討していきたい。

<災害・国際看護学領域>

1. 活動内容

1)社会貢献活動

(1) ケア検討会

令和4年度のケア検討会は、災害・国際看護学領域としては3年目の開催となった。前年度の開催を通し、地域のニーズも探りながら2回のケア検討会を企画・実施した。検討会では、地域の看護職および院生も含め多くの参加者があり、情報を共有し、類似した状況、問題に対する異なる見方、解決のためのアイデア等について、活発な意見交換を行った。参加者は、情報提供に基づいた現象の多面的な理解、そして個々の状況に応じた解決への手掛かりを見出すことができた。

① 第1回ケア検討会

【日時】令和4年6月23日(木) 18:30~20:00

【場所】Zoomによるweb会議

【参加者】外部参加者6名、大学院生8名、教員2名、計16名参加

<ケア検討会内容>

先ず初めに、以下の情報提供があった。

情報提供「災害時に病院に押し寄せる傷病者と被災者の対応」(課題)

高知県立大学看護学部 山田 覚

情報提供者から、これまで発生した大規模災害での病院に押し寄せる傷病者と被災者の状況と、沖縄、高知、愛知の想定が紹介された。また、被災者と傷病者の違い、東日本大震災における事例として石巻赤十字病院の対応、近年の各自治体の対応の変化、そして、高知県ではどのように考えられているのかの情報提供があった。最後に、今回の課題の対策の一つとして、高知医療センターと高知県立大学との連携に関し報告がされた。

情報提供後の意見交換では、ある施設では、災害時に施設に避難者が押し寄せることは想定しており、外来棟で対応することとしていた。しかし、運用方法等は十分に検討されていなかった。行政が指定した避難所ではないが、地域住民が中心となり運営することが一般的であるため、併設する看護学校の学生の応援も含め、避難所運営を検討することが議論された。他の施設では、避難所用のスペースは無いが、高台に位置するため、被災者が押し寄せることが想定され、備蓄食料を配布して避難所に移動していただくことを計画していた。食料の備蓄の仕方としては、ローリングストックを今年から開始しており、医薬品に関しては、1週間程度の備蓄をしているとのことであった。異なる施設では、備蓄品は3日分を確保しているが、賞味期限が迫っているものもあり、計画的に備蓄していく必要性を感じていた。医療資機材は、日常アウトソーシングで対応しており、委託企業の倉庫が施設の近くにあるため、一定程度は対応してもらえると考えていた。

最近自治体で計画している医療施設の近くに各種救護所を設置することは、高知県では資料のレベルでは述べられているものの、具体的な施設との調整はされておらず、また、施設側も救護所の連携は未だ考えていない状況であった。今後、高知県でも、災害医療を継続するために、施設に避難して来る被災者と軽症者の対応として、行政も含めながら救護所の活用を検討して行くことの必要性を確認した。

② 第2回ケア検討会

【日時】令和4年11月17日(木) 18:30~20:00

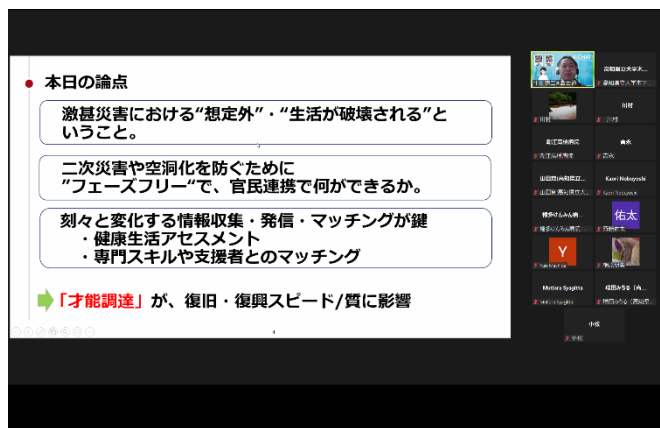
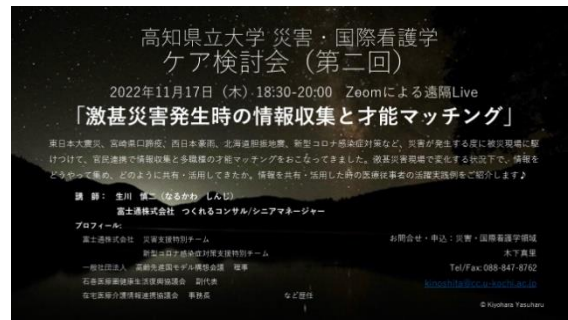
【場所】Zoomによるweb会議

【参加者】外部参加者6名+ α (1アカウントで複数名が視聴していたため)、大学院生6名、教員2名、計16名+ α 参加

〈ケア検討会内容〉

まず、災害・国際看護学領域から木下教授が災害時の情報収集の課題と自身が開発中の情報収集ツールについて説明し、今回の講師紹介およびテーマ選定の経緯を説明した。

次に、富士通株式会社の生川慎二(なるかわしんじ)氏にご講演いただいた。同氏は、富士通株式会社ソリューション部門の専門家であるが、東日本大震災発災後いち早く被災地入りし、以後、予算や人員を組織して、岩手県石巻市をはじめとする複数の被災地において、現地の医療機関が復旧するまでの混乱した状況での保健医療活動と情報管理を支援した経験を持つ。今回は「激甚災害発生時の情報収集と才能マッチング」と題して、当時の取組みとその後より発展させた、平時から災害時までフェーズフリーで活用できる情報ソリューションの事例について、動画や複数の資料をもとに具体的にご講演いただいた。



同氏は、看護職の情報収集、分析、情報活用能力について高く評価しており、これを効果的、効率的に活用することで、さまざまな課題解決が期待できるが、前例主義や、法規制などの官僚的な考え方がこうした取り組みを阻んでいる可能性を指摘した。そして、こうした垣根を取り払い、柔軟に対応できる能力のある「スーパー公務員」が被災地に居て、医療従事者や民間企業や地域がそれぞれ能力を活かして活動することができれば、被災地の復興は確実に促進するであろうとの見解を示した。

講演後は、参加者から、今回の講演が、災害

対策が最重要課題である高知県において、どのように看護が対応できるのかについて、学習する機会となったとの意見が述べられた。

2) 研究活動

災害・国際看護学領域では、それぞれの教員が研究代表者として、また、相互に共同研究者として科学研究費助成金を受けて「災害に関連する専門職者・行政と住民とのリスクコミュニケーションガイドラインの提案」(研究代表者: 山田覚、2020～令和5年度)、「全被災者の健康状態把握を支援するモバイル・ツール開発研究」(研究代表者: 木下真理、2020～令和5年度)、「地域の全体最適を目指した減災ケアの可視化とツールの開発」(研究代表者: 神原咲子、2018～令和4年度)に取り組んでいる。

研究成果として、高知女子大学看護学会誌2件、高知県立大学紀要看護学部編3件の論文投稿を行った。

学会発表は、日本災害看護学会第24回年次大会4件、第26回日本看護管理実学会学術集会1件をそれぞれ行った。

3) 領域活動

(1) リカレント教育、交流会

令和4年度現在、修了生は7名であったが、修了生を集めてのリカレント教育等は行わなかった。修了生が未だ少ないこと、在学生に関しては以下の定期的なミーティングがあることにより、具体的な交流会の開催は企画しなかった。本領域の場合、DNGLの学生は本学の学生ばかりではなく、他の4大学の学生もおり、学生同士の交流は日常的にあり、今年度も共同災害看護学専攻・災害看護コンソーシアムシンポジウムを「DNGL 修了後の活動と未来」と題して開催し、他専攻の院生も含め50名の参加があった。